

ならけんの ヒバクシャの声

～奈良県原爆被害者の手記より～



ならけんのヒバクシャの声

1945年8月の6日に^{ひろしま}広島、9日には^{ながさき}長崎に^{げんしばくだん}原子爆弾が落とされ、その年の終わりまでに合わせて21万人もの人々が亡くなりました。生き残った^{げんばく}原爆の^{ひさいしゃ}被災者、「^{ひばくしゃ}被爆者」の方々の中には、^{かたがた}原爆が^{ほうしゅつ}放出した^{ほうしゃせん}放射線で病気になられたり、いわれのない^{さべつ}差別をうけるなど、つらい人生を歩まれた方も多くいらっしゃいます。

戦争が終わり、多くの^{ひばくしゃ}被爆者が^{こきょう}故郷に帰り、^{ひっこ}引越されるなどして、^{はな}広島・長崎を離れました。^{ならけん}奈良県にも500人以上の^{ひばくしゃ}被爆者の方々が、^{かたがた}今もいらっしゃいます。

そんな^{ならけん}奈良県の^{ひばくしゃ}被爆者の方々が、^{かたがた}残してくださった声の一部を、^{しょうかい}ご紹介させていただきます。

2019.8. 入谷方直

^{ならけんげんばくひがいしゃ}奈良県原爆被害者の会 ^{かいほつこう}わかくさの会発行「^{げんばく}原爆へ^{へいわ}平和の^{かね}鐘を」 第一巻(1986.12.20)

第二巻(1990.1.10)

第三巻(1995.5.10)より

…は^{しょうりやく}省略箇所、文末の括弧内は、^{ひばくち}(被爆地 ^{せいべつ}性別又は氏名 ^{ねんれいしよくぎょう}当時の年齢職業など ^{けいさいかん}掲載巻)



げんばくとうか しゅんかん 原爆投下の瞬間

人々は、いつも通りの生活をしていました。

その瞬間、何が起きたのか理解できた人はいませんでした。

- 「稲光の数十倍か、写真フラッシュの数千本が同時に発光したかのような巨大な閃光。」

(広島 男性 16才 軍人 第三巻 P18)



- 「初め白色であった雲が黄色に変わり、

橙色に変化し、紫色ともなり、

真っ直ぐむくむくと天に昇り、

そしてきのこのこの傘のように横に広がって

いった。」

(広島 男性 ?才 軍人 第一巻 P1)

げんばく ひがい 原爆の被害

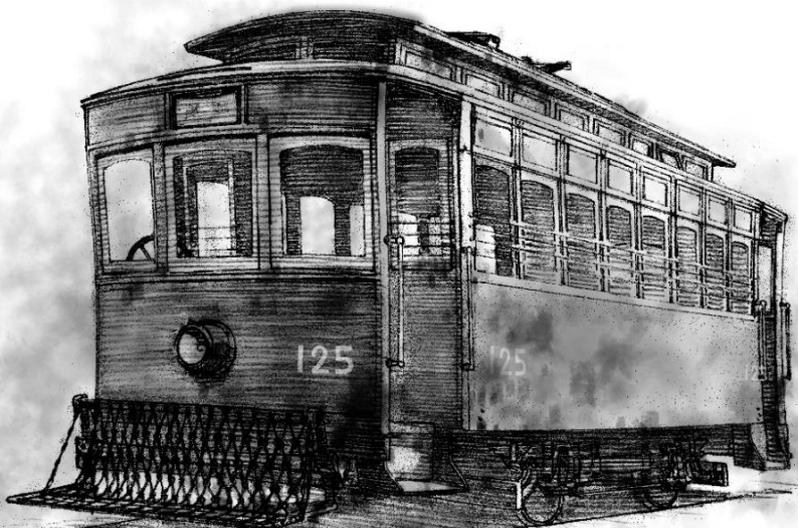
より大きな被害が出る様に上空で爆発した原爆は、巨大な火の玉になり、強力な放射線、熱線、爆風が人々を襲いました。

●「屋根瓦はまるでせんべいを並べた格好で押しつぶされており、門の支柱の太い鉄パイプはアメのように曲がっていたりで、その熱線のすごさを物語っていました。私はその瓦の上を裸足で夢中で歩きました。」

(広島 女性 24 才 家事手伝い 第三巻 P74)

●「多くの黒焦げの死体が転がり、歩いている人達はもう人間とは思えない程でございました。服はボロボロで、皮膚はペロリとずりむけて、自分の皮膚をわかめのようにぶらさげて歩いていました。今でも目に焼き付いているのは、水を求めて太田川の中に入った人々の姿です。川の水はお湯のように熱く、焼けただれた体を一層に腫れ上がらせ、…次々と川の中で死んでゆきました。」

(広島 女性 20 才 工場勤務 第三巻 P25)



たす

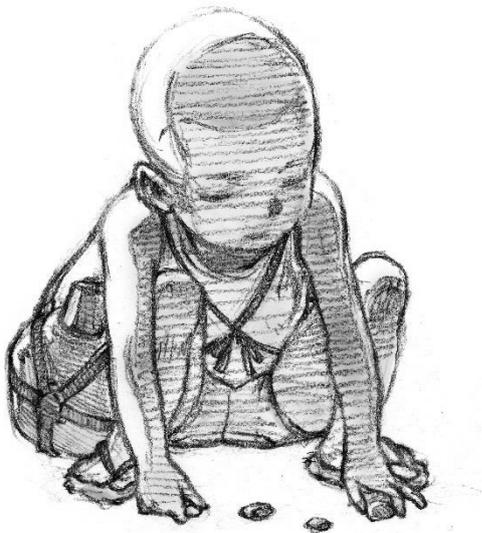
助けてあげることができなかった

多くの人々が、自分が生き残ることに精一杯で、^{すく}救いを^{もと}求める人に何もできませんでした。

そのことが、心に深い^{きず}傷となりました。

- 「兵隊さん、助けて」と私の横に^{すわ}座りこんだ十五位の男の子がいて私のそばに^ね寝ころんだ。…変な音がする。子供の^{はら}腹に穴があいていて血がブルブルと出ている、助からない。私はそこを^{はな}離れた。私には助ける手だてもない。」

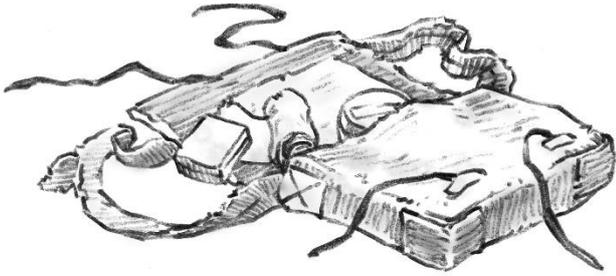
(長崎 男性 18才 軍人 第二巻 P25)



- 「…小学生ぐらいの男の子が、^す素っ^{ばだか}裸で…「おいしいうどん、おいしいうどん」と^く繰り返し^{かえ}ハッキリした声で^{うった}訴えるように^{さけ}叫んでいました。…当時はとても口に入らぬ食べ物の名を呼び続ける^{こころね}心根が^{あわ}哀れでなりません。…翌朝まだあどけな^そい^{きのう}其の少年は^ま昨日の^{しせい}儘の姿勢で死んでいました。」

(広島 男性 ?才 軍人 第一巻 P33)

きゅうごかつどう 救護活動



くすり ほうたい ぜつぼうてき じょうきょう
薬や包帯もない、絶望的な状況の中で、

ひぼく きゅうごかつどう
自分達も被爆しながら、救護活動を続けた

かたがた
方々がいました。

- 「^{ぜんしんやけど}全身火傷で^{くる}苦しみに^{もた}悶える人。^{かぶくぶ}下腹部から^{ちよう}腸が出ている人。10センチ～20センチの
^{きりきず}大きな切傷のため骨が出ている人など、^{かんごふ}看護婦一年生の私が^{たいけん}体験するには^{あま}余りにも^{ざんごく}残酷
であり^{ひつげつ}筆舌に^{ひょうげん}表現し^え得ない^{さんじょう}惨状であった。」

(長崎 北尾ミツヨ 17才 ^{かんごふ}看護婦 第三巻 P11)

- 「^{かな}今も一番胸からはなれず悲しかったのは、^{みわ}男とも女とも見分けのつかない人が、
^{きゅうご}救護の^{じゆん}順が^{あと}後二、三名というところで^{たお}バタッと横に倒れ、それが^{さいご}最期であった…。それ
に^に似た^{じょうけい}情景がそれから^{なんど}何度となく^{かえ}くり返された…。」

(広島 女性 23才 ^{かんごふちよう}看護婦長 第三巻 P24)

不思議な体験

神や仏の救いもない中で、不思議な体験をされた方もいます。

- 「校舎がくずれ落ち・つぶされ下敷きに

なっている・不意に「お兄ちゃん。お兄ちゃん」と呼ぶ声に、ハッと我に返ると、右上方に、『亡妹、香津子』の微笑する顔がある。「おお、香ちゃん」と叫んだとき、その顔が消え、そこから、外の明かりがさし込んでくるのです。私は押しつぶされ身動きできない苦が、何の苦もなく、すっと立ち上がり、その穴から、外部へ、はい出られたのです。屋根上へ立つことが

できたのです。何とも不思議な実話。五才で他界した、地藏様が好きなやさしい亡妹に導かれ、万死に一生を得た事実を信じていただけようか。」



(広島 男性 16才 軍人 第三巻 P18)

くろ あめ 黒い雨



ばくはつ
爆発から数時間後、

げんばく ねつ かさい あまぐも ほうしゃせん
原爆の熱や火災で雨雲が生まれ、放射線を出す黒い雨が降りそそぎました。

●「^{はいきよ}廃墟と化した^{むじん}無人の町^{ひろしま}広島に、^{ほうしゃのう}放射能を含んだ^ふ雨は^ふ降り^{そそ}注いだ。真黒い雨であった。

^{まなつ}真夏というのに冷たい雨であった。」

(広島 男性 ?才 軍人 第一巻 P1)

みず の 水を飲ませてはいけない

おおやけど お
大火傷を負った人は水を求めましたが、^の飲ませると^し死んでしまうと言われていました。

●「^{にゅうじ}「乳児を抱えた^{かか}母親の^{へいたい}「兵隊さん水をください…」の^だ声に、^お思わず抱き起こして^の水を^{ころ}上げようとしたところ、^{どこ}何処からともなく《いま、その人に水を飲ますことは^{ころ}殺す事だぞ!》^{おどろ}大声に^わ驚き、^{ししゅう}詫びる^{ただよ}気持ちで、^{はな}死臭の漂うその場を^ほ離れたが、^ぼあの^し母児のその^{おも}後を^{むね}偲ぶと、^{ふさ}今でも…^{おも}胸の塞がる^{おも}想い…である。」

(広島 北尾茂男 20才 軍人 第三巻 P44)

アメリカ人^{ほりよ}捕虜

原爆^{げんぱく}の被害^{ひがい}にあったのは、日本人だけではありません。

広島^{ひろしま}で被爆^{ひぱく}したアメリカ人の捕虜^{ほりよ}の姿^{すがた}を、見た方もいらっしゃいます。

- 「…相生橋^{あいおいばし}(原爆^{げんぱく}ドーム近くの T 字の橋)の袂^{たもと}まで来ると大勢^{おおぜい}の人がわいわい騒^{さわ}いで居^おり、その人混^{ひとごみ}の中^{のそ}を覗^{のぞ}いて見ますと一人の米兵^{いっばん}が後手^{しぼ}に縛^{しば}られて、一般民衆^{いっばんみんしゅう}から「親^{おや}の仇^{かたき}!!兄弟^{かたき}の仇^{かたき}!!」と石^{いし}や棒^{ぼう}で殴^{なぐ}り殺^{ころ}されて居^いるではありませんか。…午前中^{ごぜんちゅう}はその米兵^{いっばん}はまだ眼^{まなこ}をパチパチ開閉^{かいへい}しておりましたが午後^{ごご}帰りには死^しんでおりました。」

(広島 男性 ?才 会社員 第一巻 P4)

火の玉

夜になると遺体から流れ出たリンの油に火が付き、^{あお}青や^{むらさき}紫の炎や火の玉になりました。

- 「みなさんは火の玉を見た事がありか？フワーツとしてしっぽがあるのですが、それが山の方から海の方へシューシューと飛んで行くのです。それも一つや二つではなく数の多さと、みんな同じ方向へ飛んで行くのでしまいには私はこわくなりました。」

(広島 男性 24 才 軍人 第三巻 P81)



^{いたい} ^や ^{つづ} 遺体を焼き続ける

夏の暑さが遺体を腐らせ、軍の^{きゆうえんぶたい}救援部隊が^{いたい}遺体を^や焼き続けました。

- 「…小学校へトラックいっぱい^{はこ}の死体が^こ運び込まれ、油をかけて^や焼かれるのを見ましたが、^{ひめい}悲鳴が聞こえるその^{かたまり}塊には^{はんし}半死の人がおったと思います。」

(広島 女性 22 才 主婦 第三巻 P70)

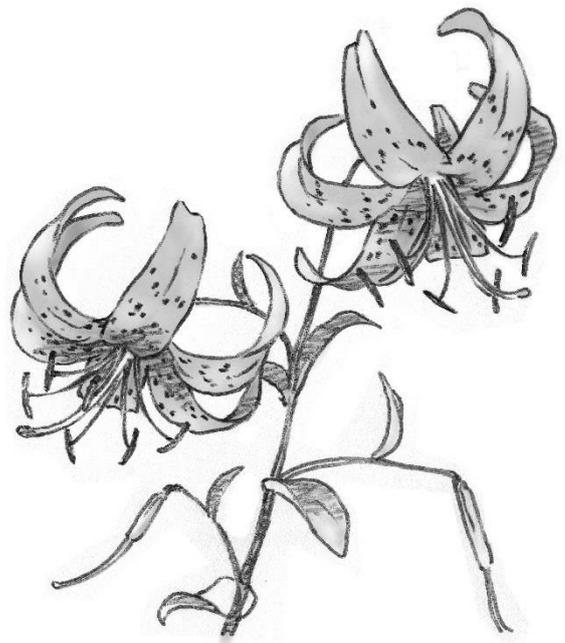
人の心にふれて

● 「…私も右半身はガラスの破片と火傷で大変な傷を負い、着ている物もボロボロになり、裸同然の姿になって…寝ている私に蜘蛛の巣の模様の着物を掛けてくださった方がありました。寝ている私に若い女の子なのに可哀想と思われたのでしょうか。…一生忘れられないことと厚く感謝しています。」

(長崎 女性 16才 学生 第三巻 P48)

● 「…数知れない犠牲へ誰であろうか、空き缶
に一枝の鬼百合の花が手向けられていた。
寂しく哀れという他なかった」

(広島 北尾茂男 20才 軍人 第三巻 P44)



ひばくご しょうじょう 被爆後の症状

げんぱく ほうしゅつ ほうしゃせん ひばくしゃ さべつ くる
原爆が放出した放射線で多くの被爆者が病気になり、差別を受けて苦しみました。

- 「原爆はあの時だけの悲劇ではありません。原爆は、二年、五年、十年、十五年と年月が過ぎ去っても続く悲劇なのです。私の長男が被爆した時は三才でした。その長男も戦争が終わり十五年過ぎた十八才の時に原爆病(白血病)となり、二年間苦しみながら二十才の若さでこの世を去りました。」

(長崎 表房一 30才 造船所工員 第二巻 P18)

- 「…次男(生後九ヶ月で被爆)は三十才で亡くなりました。幼いころから首や腕に腫れものが出てきて、その都度切ってもらっていました。結婚して二人の子もいたのですが、二十五才の時…病院に入院しました。…病名は白血病、入退院をくりかえし、先生の診断通り五年後に亡くなりました。…その次男の嫁が云うんです。被爆者や云わんといてと。娘の結婚にさしさわるとも。話たくない。思い出したくない。八月六日は いや。」

(広島 女性 25才 主婦 第三巻 P55)

ひばくしゃ ねが 被爆者の願い

●「私達はこうした核兵器の恐ろしさを決して風化させてはなりません。広島や長崎の悲劇は永く語り伝えねばなりません。しかしそれと同時に、日本人が中国大陸や南方の国々で犯してきた過ちや、真珠湾の奇襲のことも同じよう語り伝えねばならないと思います。」

(広島 尾崎敏行 20才 軍人 第一巻 P5)

●「原爆は人間らしく生きることも人間らしく死ぬことも許しません。核兵器は元々あらゆるものの絶滅を目的とした兵器です。…世界のどこの国どこの地に於いても！第二の広島・長崎があってはなりません。」

(広島 小林清二郎 25才 軍人 第二巻 P29)



～ヒバクシャの声を、未来につなぐ～

奈良県原爆被害者の会 わかくさの会は、2006年、全国で最初に解散しました。手記集「原爆へ平和の鐘を」は第三巻まで発行されましたが、奈良県内の図書館で三巻そろっているのは、県立図書館のみです。その県立図書館でさえも、原本は三巻のみで一・二巻はコピーを製本したものしかありません。辛い体験を思いだし、平和を願って書かれた手記は、「一人でも多くの方に読んでもらいたい」という願いとはほど遠い状態にあります。そして、近い将来、被爆者のいない世界がやってきます。

この世界をおおう核の恐怖に対して、私達はいったい何ができるのでしょうか。ただ一つ言えます。

原爆の真実を知る被爆者の声を、私達は絶対に忘れてはなりません。被爆者の声は、核なき世界を目指すすべての活動の原点だからです。その声を、未来につなぐために、広島・長崎のみならず地域に住む私達にできることがあるはずです。

手探りでつくったこの冊子が、被爆者の声を、皆様と未来につなぐ扉の一つになれば幸いです。

編集・イラスト 入谷方直(イリタニ マサナオ)

広島市公認被爆体験伝承者・文化財修理技師

2019. 8. 発行

電話 090-4493-7097(留守番電話に録音ください)

Eメール iritanin5327@yahoo.co.jp

この冊子に引用した手記で氏名のあるものは、手記の筆者またはご家族から全文の使用許可をいただいています。

その他の手記は、筆者名を匿名とさせていただきます。

